様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５３０６５７
研究課題名（和文）　国語科の文法教育と英語科の文法教育の連携に向けての基礎的研究

研究課題名（英文）　A study toward co-operation in the education of grammar between Japanese and English

研究代表者
森山　卓郎（MORIYAMA TAKURO）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：８０１８２２７８

研究成果の概要：本研究のテーマは、国語科と英語科の連携である。①社会的な言語習得という観点から見ると、子どもたちの国語力（文法的に的確な文理解など）はまだまだ不十分であること、②英語学習でも文法軽視の兆候があり問題があること、などが明らかになった。そこで、③「言葉」の学習としての国語科と英語科の学習を再構成する必要性を明らかにするとともに、教材開発、教員研修、教員養成の方向性についての提案を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	700,000	0	700,000
２００６年度	1,100,000	0	1,100,000
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総　計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：国語教育、英語教育、文法教育、教科文法、「言葉」の教育

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は、新学習指導要領の策定期でもあり、小学校に英語の教育を入れるかどうかが問題になっていた。その中で、現在いうところの「外国語活動」がどのような形になるのかの具体的な形はまだできてはいなかった。

英語の学習でも、まだコミュニカティヴなアプローチの重要性を考える声が大きく、文法の学習の在り方についての認識はまだ十分に大きくはなかった。

当然のことながら、同じ「言葉」の学習として「国語科」がいかに連携するべきかということはほとんど議論されてはいなかった。むしろ、一部の識者を除いてそういう発想すらほとんどなかったといえる。

また、一方で、国語科教育の在り方そのものについては、大きな観点の変換が求められていた。言うまでもなく、その原因は、PISA2003 での日本の読解力の大きな順位低下である。

特に「記述する力」「熟考する力」ということを含めた、社会で活用できるような「読解力」の不足といったことが指摘されてきたが、それへの対応についてはさまざまな議論がなされている段階であった。これも新学習

指導要領の策定期にあたっていたということが考えられる。
　従来の国語教育の在り方に対する見直しも叫ばれていたが、特にその見直しの具体的な方向性については必ずしも定まってはいなかったと言える。
　例えば、文法教育の在り方という点でも、古典語の学習につながる国語での文法教育と、母語を見直すという観点からの新しい文法学習の必要性も十分には認識されていなかった。当然、国語の側でも「外国語の学習」との連携という発想もなかった。

２．研究の目的
　そこで、本研究は相関する三つの目的を設定した。

(1) 国語科を言葉の学習であるという観点から見直し、子どもたちの言葉の実態をさぐるとともに、それに対応した具体的な学習内容の分析と実質的･具体的な学習の提案をする。

　ふだんの言葉を見直すような国語教育をすることは従来十分ではなかった。「日本語」は、母語として当たり前に使っているからである。しかし、たとえば、
　　米洗う前{を・に・へ}蛍の二つ三つ
のような表現の違いを考えるというように、あえて言葉を取り上げることは非常に重要なことと言える。そうすることで、適切な言語感覚を身につけることができるからである。
　本研究は、こうした問題意識に立って、母語である「国語」の学びを「言葉」という観点から検証し、子どもたちの言葉の力を分析するとともにそれに対応した教材を開発することを目的とした。

(2) 英語科、「外国語活動」を「言葉」の学習という観点から見直し、より深く効率的な学習のあり方とは何かを考察する。

　さらに、「言葉の学習」として「母語」をみるならば、それは、英語をはじめとする他の「母語以外の言葉」の学習にとっても有効な視点を得ることになる。
　例えば、母語のこと考える視点があれば、日本語で「未来」をどう表すか、ということと英語で「未来」をどう表すか、ということが対照できる。一部の教室では、"will"を一律「でしょう」で置き換えるような指導がなされることがあるが、その根本には、母語での「未来」の表現はどうかを考える視点がないということがある。そのため、"We will make a brief stop at Nagoya."のような表現に対して、「名古屋に停まるでしょう」のような珍訳をつけるようなことになるのである。
　そこで、本研究では、国語科の「言葉」の学びという側面を見直すとともに、小学校「外国語活動」も含めた英語の学習のあり方を考えることも目的とした。

(3) 教科の縦割りの垣根を取り払い、国語と英語（外国語活動）との教科間の連携の在り方を探ると共に、その海外での事例を分析する。

　上記の二つの研究目的は相互に深い関連がある。その連携を具体的な形で明らかにするとともに、すでに小学校で英語を教えている韓国やタイにおいて、どのような成果と課題があるのかも分析する。

３．研究の方法
　本研究は国語学および国語教育の専門家と英語学および英語教育の専門家という理想的なチームを構成し、教育的側面を「言語」という観点から詳しく分析するという方法をとった。
　具体的には、次のような観点である。ほぼ隔月に研究会を行い、研究を深めるとともに、それぞれの立場から、現場での教育ということを見据えた様々な分析と教材開発、提案等を行った。
(1) 国語科と英語科での文法学習について「言葉の学習」という側面から、国語科および英語科の学習内容を見直し、必要に応じて子どもたちの言語操作能力を調査する。
(2) (1)によって、具体的にどのようなことが必要かを教育現場に発信し、具体的な教育的提案を公にする。
(3) また、海外で小学校における英語教育が導入されているが、そこでの実態を調査し、母国語教育と外国語教育の連携のあり方、外国語教育の方法論を検討する。

４．研究成果
　本研究の成果は実証的な研究と、具体的な教育現場への提案という形を取る点が特徴である。
　成果は大きく国語教育に関するもの、英語

教育と「外国語活動」に関するもの、そして、両者の連携に関するもの、の三つに分けることができる。

(1) 国語教育に関するもの

①まず、子どもが母語についてどのような運用能力を持つのかを調査した。これによって、たとえば小学校三年生では、「太郎は次郎を呼んだが、～」と「太郎は次郎が呼んだが、～」というように語順を変えることで、「誰が呼んだ」かの正答に有意差が生ずること、「太郎は運動場にいるじゃない」という文の論理関係が必ずしも３割程度しか正確に理解されていないことなどが明らかになった。

すなわち、小学校段階では母語を注意深く運用する十分な能力がつけられているとは言えないということが明らかになった。

現職教員には、総論として「言葉を大切にする必要性がある」という認識はあっても、どのような点に問題があるのかが、具体的に明らかではなかった。当然、それに対する教材の開発もできてはいなかった。

そこで、しっかりと言葉の意味を踏まえた読み取りの力をつけるための教材を開発した（森山 2007）。また、ここでは、PISA で問題となったような「新しい読解力」の在り方についても「言葉」という観点から検討したほか、「熟考評価」するような読解力をつける教材も含めた（これは２年未満で３版を重ねた）。

また、多くの現職教員にも読んでいただけるようなかたちで雑誌論文も執筆したほか、さらに低学年、中学年、高学年用にワークを現職教員の協力を得て完成させた（森山 2009）。

②さらに日本語学会 2006 年春季大会のシンポジウムで国語の文法教育を取り上げたが、参加者から画期的だという声があがるなど、日本語学研究をどう研究に応用するかという方面においても、一定の成果が得られた。本研究の視点により、いくつかの文法研究、文法教育研究の論文も公刊することができた。これには、たとえば文化審議会の敬語の指針に対して理論的にも教育的にもどのような問題があるかを指摘した森山 2008 などがある。

③杉藤・森山 2007 など、音声と文法を考える立場から、国語教育全般にかかわる音読、朗読を見直した書籍も刊行した。

④そのほか、多数の教育委員会研修会や学校での校内研究会、研究発表会での講演などでも本研究で得られた知見を教員の皆様にお伝えすることができた。

(2) 英語教育に関するもの

①ちょうど本研究の実施時期では、英語の学習が小学校に入るかどうかについては大きな議論となっていた。そこで、2007 年 7 月に大津由紀雄教授（慶応大）を招き、公開シンポジウムを開催した。研究者、現職教員、学生など多数の来場者があり、広く議論を深めることができた。

②小学校および中学校での英語教育については（国語教育も含め）韓国への調査、タイへの調査というように、メンバーでの海外調査を実施した。韓国では春川教育大学とその附属学校のご協力を得た。タイではスアンスナンタラチャパット大学附属実験学校および私立マリー校、およびタイ教育省のご協力を得た。その後、これらについては報告論文を作成した（前者は加藤ほか 2007、後者は投稿中）。

これによって、韓国での小学校英語導入では、相当程度の教員研修が必要だったこと、タイでの小学校英語プログラムにはエリート養成的なコース設定があること、いずれでも文法の学習が比較的重要視されていること、などが明らかになった。

③英語教育に関する研究も進め、どのようにして英語の文法を獲得するのか、そして、それにはどのような課題があるのか、を検証した。たとえば、梅原 2007 は"Let's cooking"のような誤表現を正しいとする大学生が圧倒的に多いことなど、文法教育の課題を改めて指摘している。

(3) 国語と英語の連携に関するもの

①特に小学校に「外国語活動」が新学習指導要領によって決定されたので、それに対応する形で、現場の教員（小学校から高校まで）に有用なものとなるよう内容を調整し、各研究者の研究の成果を具体的な出版物としてまとめ、公刊する運びである（慶応義塾大学出版）。ここでは、理論的な研究と具体的に現場の教員の役に立つ内容をわかりやすく整理した各論編という構成にしている。

②そのほか、各研究者がそれぞれの立場から関連する論文を公刊し、また、研究発表を行った。日本語教育の知見を国語教育に生かすもの、認知言語学から言語教育の基礎理論を考えるものなど、重点の置き方は様々であるが、本研究での成果がそれぞれに活かされている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２０件）
①森山卓郎・梅原大輔他 2009（投稿中）「外国語活動」に向けて　―タイにおける初等中等学校の英語教育が示唆するもの―」（『京都教育大学紀要』155 に投稿中）
②森山卓郎 2008 「教師に必要な言葉の力を見直す　表現力」『実践国語研究』286 pp.104-107
③森山卓郎 2008 「教師に必要な言葉の力を見直す　コミュニケーション力」『実践国語研究』287　pp.104-107
④加藤久雄 森山卓郎 梅原大輔 他 2007 共著 「韓国における国語科教育と英語科教育--韓国春川市における授業実践の視察から」教育実践総合センター研究紀要(16),249～254,
⑤森山卓郎 2008 「命令表現をめぐる敬語の体系―「敬語の指針と文法」―」『日本語学』27-7　pp.18-26
⑥濱本秀樹 2008 「早期英語教育論―なぜ児童は英語の絵本を文法、語彙知識なしで楽しめるのか―」『神戸松蔭女子学院大学 Shoin Literary Review』41 pp.37-71
⑦森篤嗣 2008 「学校教育における語彙の教育」『日本語学』27-10　pp.4-15
⑧菅井三実 2008 「言語活動の充実と実践上の課題」『別冊教職研修』2008-9p20-23
⑨梅原大輔 2007「Let's構文への文法意識とその習得」『 甲南女子大学研究紀要 43 号文学・文化編』pp.21-28
⑩児玉一宏 2007 言語習得と構文形成　『月刊言語』36-8　pp.68-76
⑪濱本秀樹 2007　「早期英語教育における文法発見のプロセスについて―仮説毛性推論と認知的方策による解明―」『英語教育研究』31　pp37-71
⑫森山卓郎 2007 「記述力の四要素とその指導のポイント」『実践国語研究』280　pp5-7
⑬森山卓郎 2007 「教師に必要な言葉の力を見直す　音声言語力」『実践国語研究』282pp104-107
⑭森山卓郎 2007.6 「教師に必要な言葉の力を見直す　語彙力」『実践国語研究』283 pp.104-107
⑮森山卓郎 2007 「教師に必要な言葉の力を見直す　文法力」『実践国語研究』284 pp104-107
⑯森山卓郎 2007 「教師に必要な言葉の力を見直す　読解力」『実践国語研究』285 pp.104-107
⑰森山卓郎 2006.10 「並列」「累加」の接続詞の機能―「そして」「それから」などをめぐって―」『日本語文法の新地平３　複文・談話編』pp187-207
⑱菅井三実・黛穂高 2006 「言語能力と認知機構の互換性に関する覚書」『兵庫教育大学紀要』27　pp.63-71
⑲森山卓郎 2005 「と」「や」の違いをどう説明するか」『京都教育大学国文学会誌』32pp.1-10
⑳森篤嗣 2005 「学校文法における格の取り扱いについて」『実践国文学』68pp.1-14

〔学会発表〕（計５件）
①森　篤嗣　2008･6「日本語能力試験による中高生の聞き取り能力調査」全国大学国語教育学会（茨城大学）
②濱本秀樹　2008･5「児童の絵本理解の認知的解明」関西英語教育学会（神戸大学）
③森山卓郎　2007･12 「たのしいこくご―社会的言語習得と第二言語習得―」慶應義塾大学言語文化フォーラム
④森　篤嗣・豊田誠 2007･11 「日本語教育の方法を応用した話し言葉教育の試み―ロールプレイを用いた高等学校国語科の授業―」全国大学国語教育学会
⑤山室和也; 砂川有里子; 森山卓郎; 鈴木泰; 仁田義雄 2006.5 「文法研究と文法教育」日本語学会 2006 年度春季大会シンポジウム

〔図書〕（計６件）
①森山卓郎（編著）2009『新しい国語力のためのワーク（低学年編）』明治図書 全 100
②森山卓郎（編著）2009『新しい国語力のためのワーク（中学年編）』明治図書 全 100
③森山卓郎（編著）2009『新しい国語力のためのワーク（高学年編）』明治図書 全 100
④森山卓郎 2007『「言葉」から考える読解力理論＆かんたんワーク』明治図書 全 98
⑤杉藤美代子・森山卓郎 2007『音読・朗読入門』（共著：杉藤美代子）岩波書店 全 176
⑥森山卓郎 2006『言語科学の百科事典』（共編：日本語学編を担当）日本語学編 3-2「日本語の文法」pp292-312 丸善 全 862

６．研究組織

(1)研究代表者

森山　卓郎（MORIYAMA TAKURO）
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80182278

(2)研究分担者

加藤　久雄（KATO HISAO）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40135827
菅井　三実　(SUGAI KAZUMI)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：10252206
富永　英夫（TOMINAGA HIDEO）
兵庫県立大学・経済学部・教授
研究者番号：10180176
濱本　秀樹（HAMAMOTO HIDEKI）
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：70258127
梅原　大輔（UMEHARA DAISUKE）
甲南女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20232907
児玉　一宏（KODAMA KAZUHIRO）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40340450
森　篤嗣（MORI ATSUSHI）
国立国語研究所・日本語教育基盤研究センター・研究員
研究者番号：30407209